激動の昭和を貫いた歴代宰相（一）

土田　良吉

大正14年生れの私が劇的な96年のみちを振り返る。この年（１９２５）、愛宕山から、日本はじめてラジオ（東京放送ＪＯＡＫ）が放送された。アメリカより僅かに5年遅れ。１９２８（昭和２年）、全国放送が開始になり日本国中、新しい文化に恵まれます。一方、昭和の大不況の真っ只中に、教育勅語を拝し育った少年時代は、実は厳しい軍国主義への道のりでした。短かったが、決死の軍隊生活。20歳で終戦・復員。暫くは屈辱感に萎れ、虚脱と混沌が続きます。客観的に真相を知るには永い年月が要りました。5年に亘る死闘の第2次世界大戦のなか、激動の昭和を命がけの舵取役だった歴代宰相を想うとき、その決断がことごとく裏目に出るなど、苦悩は計り知れません。年を経るごとに新事実が分かり、時を同じくした老骨には感慨ひとしおです。

大正デモクラシーのさなか、大正13年6月11日、立憲同志会総裁の加藤高明が第24代首相に就く。―たとえ身命を失うとも―・が信条だった。病で短命66才。ついで、大正15年12月1日第25代首相の若槻礼次郎。在任中に大正天皇が崩御され、世は昭和に遷る。

昭和15年戦争の始まる昭和の初期、昭和2年1月、第26代首相に田中義一、満州事変の咎で辞任、悶死ともいわれる65歳。第27代首相に浜口雄幸、右翼青年に狙撃されるが一命を取りとめる。第28代首相は再び若槻礼次郎。第29代首相の犬養毅は就任後間もなく5・15事件で海軍将校により射殺77歳。「話せばわかる」を言い残す。（末尾に詳細）30代首相は退役海軍大将の斉藤実。挙国一致内閣・穏健内閣であったが・・・

第31代首相岡田啓介2・26事件に遭うも隠れて凶弾を避けることが出来た。第32代首相広田弘毅、軍部の横暴を抑え切れず、軍人戦犯に付き添うかのようにA級戦犯で絞首刑の判決を受けた、文官で唯一人70才。第33代首相には林銑十郎。

第34代首相の近衛文麿、戦後、ＧＨＱへ出頭指定の、昭和45年12月16日未明、自宅で青酸カリを服毒自決。56歳であった。―ホームページより――午前2時ごろ、近衛は「僕の心境を書こうか」と、息子の通隆に言い、近衛家の便箋に次のように記した。〈僕は支那事変以来、多くの政治上の過誤を犯した。之に対し深く責任

を感じているが、いわゆる、戦争犯罪人として、米国の法廷において裁判を受けることは、堪へ難いことである〉と。午前３時頃、通隆は意を決して「明日は巣鴨プリズンに行って下さいますね」と訊いた。近衛は「そりゃ行くとも」と答えた。通隆が「今日は親子で一緒に寝ましょうか」と言うと、近衛は「僕は人がいると寝られないから一人にしてくれ」と言った。午前６時ごろ、千代子夫人が、近衛の部屋に燈があるのを見て入っていくと夫はすでにこと切れていた。体の温かみは残っていた。枕元に青酸カリが残されていた！国民の絶大な人気を集めた、政界のプリンス公爵宰相、近衛文麿。名門貴族出身の近衛首相の目的は、軍部の動きを制する事であった。『いかなる国難が起こっても、必ずこれに打ち勝ち、有終の美を遂げずんば断じてやまぬという、不退転の決意であります』と。然し打つ手が悉く裏目に出て軍に翻弄され日中戦争も、どろ沼化に導くことになる。遂に、日米開戦に踏み切った。

第35代首相の東条英機。現役軍人である東条は、戦況の悪化を受け入れず国民に徹底抗戦を課した。東条は戦犯逮捕を知るや、ピストル自殺をはかるが死にきれず、戦陣訓も叶わずＡ級戦犯で絞首刑。63歳。東京裁判は勝者の裁き、復讐の判決だった。

以上は、軍と国民とのはざまで葛藤を続け、命がけで国の舵取りを担った。歴代首相たちの縮図である。ＮＨＫテレビは最近、百年の時を追体験する世紀の映像、第12集を放映。それは激動の時代に国家の命運を担った男たちの物語。知られざる事実に驚くと共に感銘を深めました。その骨子を採録し本文とします。

そして戦後、軍に代わって首相たちが向き合ったのは戦勝国アメリカ。戦後初の第43代首相に東久邇宮稔彦王・第44代首相幣原喜重郎・第45代首相は吉田茂、そして第46代首相片山哲・第47代芦田均・第48・49・50・51代首相吉田茂・第52～54代首相鳩山一郎・第55代石橋湛山・56から57代岸信介・58、59代池田勇人と続き、戦後の苦難を克服した。

昭和26年、日本の講和独立に奔走した吉田茂は第50代首相当時、独立を条件として、再軍備を求めるアメリカに対して、熾烈を極めた講和交渉、吉田は経済復興が先だと主張。あの手この手で応戦した。『アメリカが再軍備をやれと言った。私は冗談言うなって言い返した。金のかかる軍備はアメリカ持ち』と。吉田の首相歴・第45・48・49・50・51代，通算５回当選は吉田ただ一人。ワンマン宰相振りを発揮、在任期

間は延べ２６１６日におよんだという。
日米安保条約改定を目指し、生命をかけた第57代首相の岸信介。昭和35年6月、改定に反対の大掛かりなデモ。条約改定を進める岸に対し、民主主義の危機を叫んだ人びとが国会を包囲し退陣を求めた。警察官の凄い暴力。警察隊まで動員しての条約改定は承認され、岸は自ら辞任した。
戦争、敗戦、独立をと首相達は国民の希望を背負いながら国家のかじ取りに命を賭した。時代の変遷と共に、近代化した高い塔の建物は、世界に誇るわが国会議事堂。このドームの中には上野東叡山寛永寺の五重塔が楽に入ると言われており、建築材料、調度品は全部、国産品を使用している。国会議事堂は二・二六事件が起きた昭和11年に完成した。議事堂が完成したとき、祝いの言葉を述べたのは当時、貴族院議長を務めていた近衛文麿だった。45才という若さで首相に就任するのは、この翌年のことである。「僕の志は知る人ぞ知る」近衛文麿の強い信念だった。
日本の首相の歴史は、元長州藩士の男から始まった。初代首相伊藤博文。明治18年伊藤が初代首相に選ばれた理由の一つは英語が話されたからだと言われている。伊藤は、幕末にイギリスに密航、英語を身につけた国際的な視野を備えている事が明治首相の条件だった。１９０９年10月26日不幸にもハルピンにて暗殺された。薩摩長州以外で初めて首相になったのが元佐賀藩士で第７・８代首相の大隈重信。演説の名手として名高い大隈の貴重な録音が残っている。『国民的勢力は何によって導かれるかというと即ち世論である。この世論の勢力が議会に集中されて初めて帝国議会の威厳、帝国議会の信用がここに成り立つのである』。大隈は言葉の力で世論をまとめ、初めて政党内閣を築いたのである。第12代首相、公家出身の西園寺公望は。20代のほとんどをパリで過ごした国際派の首相だった。首相の座を退いたあとは元老と呼ばれる天皇の補佐役となり、首相候補を天皇に推挙するという重責を担っていた。その西園寺が、最も期待を寄せていた人物は公家出身の近衛文麿であった。近衛家はこの国の中で最も格式の高い名家。祖先をたどれば、大化の改新で活躍した藤原鎌足に遡り、古代から天皇に仕えた家柄である。近衛文麿は公爵家でありながらマルクス主義を研究するなど、型に嵌らない自由闊達な人物であった。身長１８０㎝、ゴルフを愛するスポーツマン。結婚は22才、相手は、もちろん英語も話せた。
昭和12年6月、第34代首相に近衛文麿が就任する。

二・二六事件の翌年である。若き公爵首相の誕生は、新しい時代の首相として歓迎された。首相誕生を祝う提灯行列があった。西園寺公が近衛に期待したのは軍の暴走を抑えること。だが二・二六事件を機に軍はテロの恐怖をちらつかせながら、大臣の指名や予算にいたるまで政治に口を出すようになった。近衛は、首相になった決意をこう述べている。近衛文麿の手記より『ややもすると性急に猪突したがる軍部一派を、出来るだけ抑えると共に彼らの要求の内合理的なものは取り上げていく』。しかし内閣発足から僅かひと月後、近衛は軍の横暴振りを、身を以って知ることになる。

7月7日、日中戦争が勃発・近衛は直ぐに不拡大方針を決定。軍の押さえ込みにかかった。しかし陸軍は黙っていない。杉山元陸軍大臣は増援軍の派遣をこう切り出してきた。杉山大臣の言葉より―『5千5百の日本軍と北京・天津地方に居留するわが日本人を皆殺しにするにしのびず』。杉山の巧みな言葉に、近衛の心は揺らぐ。近衛は、それも「一理あり」と中国への応援軍の派兵を認めます。―近衛文麿の言葉―『居留民の生命財産の保護という名目であるから、反対できない。出兵によって日本の強硬なる戦意を示せば、中国側はすぐに折れることは間違いない』―昭和12年9月、日比谷公会堂―しかし中国側は徹底抗戦を表明。近衛は国民に戦争協力をよびかけた。日比谷公会堂での演説はラジオで全国に中継された。『この日本国民の歴史的大事業を、我々の時代に解決するという事は、今日生を受けたるわれら同時代の光栄で有り、我々は喜んでその任務を遂行すべきであると思うのであります』。拍手・・・。

日本軍の侵攻は中国に利権を持つ欧米諸国に衝撃を与えた。１９３７年(昭和12)10月、アメリカのフランクリン・ルーズベルト大統領は「世界に無法地帯を生み出す国家を、国際社会から隔離すべし」と主張。「いま文明の基盤が危機に曝されている。アメリカは平和のために積極的に行動するのだ」と。日本への警戒心をあらわにした。

日本軍は、聖戦の兵を進めて4ヶ月、昭和12年12月、中国国民政府の首都南京を陥落した。

♪見よ東海の空明けて旭日高く耀けば天地の精気……♪

之は後楽園球場で催された戦勝祝賀会。歴史的な戦果によって近衛の人気は頂点に達した。この戦果を背景に近衛は和親工作を始めます。だが陸軍の強硬論におされ賠償を求めるなど、和平の条件をつりあげてし

まう。中国の国民政府・指導者蒋介石が歩み寄ることがなかった。『首都南京を失い、支那民衆に塗炭の責め苦を負わせながら尚も抗戦の迷夢より覚めざる蒋政権、之に対し奇策を案じた近衛。『風見内閣書記官長より内外に声明・帝国政府は爾後、国民政府を相手とせず』と交渉打ち切りを宣言、強い態度に出ることで蒋介石を話し合いの場に呼び出そうという無謀の策であった。それも、和平への道は完全に閉ざされた。

昭和13年重慶爆撃、---近衛文麿の手記―『軍がこれだけの事変を起こすつもりならば、事前にしっかりした計画を立てて、万全な準備を整えた上でやるべきであるのに、そういう計画も無しにずるずると事件に引き摺られていったことは、何としても残念である。事変当初は不拡大方針をもって、出来るだけ現地的解決を図ろうとしたのであるが、如何いうわけか実際においては拡大するばかりであった』。2年後の夏、昭和15年7月一度内閣を退陣した近衛は軽井沢の山荘で過ごしていた。再び首相になった時に備え今度こそ軍を抑えようと案を練っていた。7月16日、米内内閣は突如総辞職を決行、ここに、強力新政治体制確立の中心的存在である近衛文麿公は、軍を抑えるための組閣の人事を考えます。近衛公はまず、陸・海・外の三閣僚を決定し、19日午後3時、荻窪の私邸にて四相会議を開きました。当時、陸海軍の大臣は夫々の軍から推薦されていました。陸軍大臣は押しの強さで知られていた東条英機が就任、対する近衛は外務大臣に松岡洋右を起用。東条にも増して強気な松岡を外交のトップに据えることで、軍の動きを封じようと考えた。然し近衛の目論みは今回も裏目に出てしまう。9月ドイツの特使外交官であるスターマーが来日すると松岡は近衛の意向を無視し一人で日独伊三国同盟に突き進んだ。

この時、ヨーロッパでは第2次世界大戦が勃発していた。昭和15年6月、ドイツ軍は、パリ占領。フランスなどヨーロッパ諸国を次々と制圧。松岡は「今こそドイツと同盟を結びドイツの勢いに乗るべきだ」と強く主張した。一方で近衛はドイツに好感を持ってはいたが、三国同盟には消極的だった。アメリカの出方が気になっていたからである。アメリカはドイツが戦うイギリスを支援。世論も反ドイツに大きく傾いており、反ヒトラーパレードか行なわれるほどであった。近衛はドイツと軍事同盟を結べば、アメリカを敵にまわすことになると信じていたのに、松岡から三国同盟の真の狙いを聞き、近衛は又しても考えを変えた。それは

将来的にソビエトを加えた四カ国による巨大同盟国を作るという構想。既に、(昭和14年8月)ソビエトと不可侵条約を締結していたドイツが交渉役を担うということである。―近衛文麿の手記より―『ドイツとソ連とは親善関係にあり、欧州の殆どはドイツの手に落ちている。この情勢においてドイツと結び、さらにドイツを介してソ連と結び、日独ソの連携を実現して、英米に対する我が国の立場を強固にする事はアメリカ・イギリスとの戦争を回避し、太平洋の平和に貢献できるのである。昭和15年9月27日、日本は、ドイツ・イタリアと軍事同盟を締結。近衛は、『圧倒的軍事力を持つソビエトが、三国同盟に加われば、その力を背景に、英米との衝突を回避できると考えた』。近衛の演説『今回政府は、世界歴史の一大転換期に際し、ドイツおよびイタリアと三国条約を締結し、世界恒久の平和と進歩のため、協力邁進することに決したのであります』。一同天皇陛下万歳！万歳！万歳！ところがヒトラーはソビエトと条約を結ぶことなど毛頭考えていなかったのである。

翌昭和16年6月、ドイツ軍は不可侵条約を破り、ソビエトに侵攻。近衛の構想はヒトラーの野望に打ち砕かれた。――近衛文麿の手記より―『(三国)同盟の主たる目標である日独ソ提携の希望は完全に遂に消え去った。将来三国同盟より生じる危険、すなわち対米戦の危険に陥れば、我が国にとっては由々しき一大事である。第一それでは同盟を結んだ意義が全くないではないか』。8月近衛は、日米開戦を回避すべく、ルーズベルト大統領に会談を申し入れた。だが、交渉は難航した。―駐米大使野村吉三郎―「日本が枢軸国の一員たる関係上、アメリカの戦備の向上とともに、日本に対しは相当に風当たりが強いのであります」。交渉から二ヶ月。駐米大使から近衛に知らせが届いた。『両国首脳部の会見は、絶対見込みなし』と。近衛は最後の賭けに出た。アメリカを会談の席に着かせるために、陸軍大臣東条英機に『中国からの撤兵を求めた』のである。しかし東条は断固として跳ねつけた。―東条陸軍大臣の言葉より―『中国駐兵問題は陸軍の生命であって、絶対に譲れない。この際アメリカに屈すれば、ますます、高圧的に出て、とどまることがないであろう。人間たまには、清水の舞台から目を瞑って飛び降りることも必要だ』と、東条は強気で答えた。

――近衛文麿の言葉より―近衛はこう答えるしかなかった。『一億国民のことを考えるならば、責任の地位にある者として、それは出来ることではない』と。

10月16日。軍に屈した近衛は内閣総辞職を表明。2日後、新内閣が発足。昭和天皇は、日米開戦回避への望みを新内閣に託した。しかし首相になったのは、主戦論を唱える東条英機であった。生きて虜囚の辱めを受けず。東条英機の強気はたかまった。

東条英機は軍人だった父のもと、軍事学の基礎を学ぶと共に、陸軍将校としての精神を叩き込まれた。陸軍の軍人こそが天皇の恩顧を受ける選ばれし者。東条の心に強いエリート意識が芽生えた。関東軍参謀長・陸軍次官・陸軍大臣と出世コースを駆け上がった。昭和16年10月東条が首相に抜擢されたのはアメリカとの戦争にはやる陸軍を押さえ込めるのは、最早同じ陸軍で東条しか居ないと目されたからである。天皇は「戦争だけは避けるよう」西園寺公を通じ、東条に伝えた。東条首相は、御意を体し自ら陸軍大臣を兼ね、閣僚も相応しい人事とするなど主戦論を抑えにかかるが、とき既に遅し！強硬派だった東条を軍部内では「裏切り」の声さえ上がった。閣議を重ねたものの、肝心の北支戦線撤退は杉山大将の一喝で断念。かなめの日米平和交渉には、アメリカが応じぬ。首相は行き詰まった。一方で、戦争の準備も着々と進めることになった。

昭和16年12月8日、日本海軍はアメリカの基地ハワイ真珠湾を奇襲。太平洋戦争が始まった。東条『東亜全局の平和は、之を念願する帝国のあらゆる努力にもかかわらず、遂に決裂のやむなきに至ったのであります。帝国の隆替・東亜の興亡まさにこの一戦にあり』と。東条の秘書官はの日の様子をメモに書き留めていた。秘書官のメモより―『会食中ハワイ攻撃の快報あり、東条は「予想以上だったね。いよいよ、ルーズベルトも失脚だね」と大変喜ばれた』と。だが東条の読みは外れた。

ルーズベルト大統領は『昨日１９４１年12月7日は恥辱の日となりました。リメンバーハワイを合い言葉に』アメリカの戦意は一気に高揚した。一方日本軍は、昭和17年1月マニラを陥落。敵首都がついに我が軍の手に帰して。同2月、シンガポール陥落。一方、日本軍はアジア各地で快進撃を続け、昭和17年3月、ラングーン陥落。東条は希代の英雄ともてはやされた。

軍需の飛躍的充実には機械工業が高度に発達しなければならない。「諸君しっかり頼みます」と、東条首相が東京の日立精機工場を訪問しました。東条内閣にとって軍需産業の強化は最重要の課題。軍需産業を担う重要閣僚、商工大臣のポストに東条が指名してい

たのが後の首相・岸信介である。政治家になる前の岸は、満州国の経営で、辣腕を奮った経済官僚だった。岸は、ソビエトに倣った五ヶ年計画を実行。満州国に重工業を根付かせた。東条はその実績を高く評価していた。岸は満州で成功させた統制経済を、日本でも実践。中小工業を整理統合し、限られた労働人口を軍需産業に集中させたのである。生産力拡充に銃後の務めを果たすべく、敢然転職した中小商工業者更正の姿を視察するため、岸商工大臣は、一日、郡山の日東紡績を訪れ、今すっかり仕事に慣れきったこれらの人々に心から激励の言葉を贈った。「諸君が立派にやるかどうか、次に来るべき何十万の人々の手本になるわけだ。シッカリやって下さい。元気で」。

昭和17年12月、開戦から丁度1年。町々には、米英打倒・・・戦い第二年をも必勝の信念もって勝ち抜かんとする決意みなぎり、この日帝都は感激の坩堝と化す。国民よ想起せよ！昭和16年12月8日―黙祷―」。この日、全国一斉に必勝祈願が行なわれた。「東条は、もし此の戦争で負けるとすれば2つの理由しかないと考えていた。陸海軍の対立、そして国民の間に厭戦気分が広がることである。敵はアメリカでなく国内にある。靖国神社に集まった3万5千の群集を前に、銃後の備えを訴えた。『諸君が毎日毎日の生活における一挙一動が、明日とは言わず、今日ただいま、前線の戦闘力を左右しておると称しましても、過言ではないと信じます』。―東条英機の言葉より―『国民の大多数は灰色である。国民を率いていく者としては、この大多数の灰色の国民をしっかり掴んで、ぐんぐん引きずってゆくことが大切である。大多数の灰色は指導者が白と言えば、また右と言えば、その通りについてくる』とある。しかし戦況は悪化し、アメリカの圧倒的な軍事力の前に、日本軍は追い詰められていくのである。

昭和18年2月、ガダルカナル島撤退。学校では本土決戦に備える訓練が始まった。竹槍は軍が定めた正式な兵器であった。男性の働き手が徴兵によって激減する中、その穴埋めの労働力として少女達もかり出された。戦場も銃後も、逼迫の度を増していった。

昭和18年11月。戦況が悪化するなか東条英機首相は、アジア5ヶ国の首相を集めて東京で大東亜会議を開催した。日本はアジア各国の団結を訴えたのです。この会議には、インドの独立運動家・チャンドラ・ポーズ（自由インド仮政府主席）も出席。インドを脱出し、日本政府のひごのもと、イギリスからの独立を目

指していたポースは、この会議に先立って、日本との協力について次ぎのような声明を発表しています。ポーズは「日本こそ19世紀に、アジアを襲った欧米の侵略を食い止めんとした、アジアにおける最初の強国である。アジアが復活するには、現在のおいても強力な日本が必要である。中国との紛争が勃発したことによって、確かに日本に対するインド人の感情は少し悪くなった。しかし大東亜戦争が始まり、事態は根本的に変化した。なぜならば、こんにち日本はインドの敵イギリスを相手に戦っているからである。インドの民衆はただひたすらにイギリスから解放される事を熱望している。つまり、インドの独立を支援してくれるものはインドの友である。と―NHK世紀の映像から―

しかし昭和19年6月、アメリカ軍は、東条が国防の要としていたサイパン島に上陸、激しい地上戦で、日本軍は壊滅。最高司令官南雲忠一中将は全軍に玉砕を指令。―南雲中将の言葉より『戦陣訓に曰く、生きて虜囚の辱めを受けず、悠久の大儀に生きるを悦びとすべし』。「捕虜になるよりは死を選べ」と命じる戦陣訓。発したのは東条英機。戦陣訓を守り、女性や子どもまでも痛ましい最期を遂げた。

それでも東条に戦争を止める考えはなかった。当時の言葉が残っている。「サイパンの戦況、昨今の中部太平洋の戦況は、天がわれわれ日本人に与えられた啓示である。まだ本気にならぬか、真剣にならぬか未だかまだかという天の啓示だと思う。真にわが底力をだすのは今である」と。

一方政界では、サイパン陥落を機に、東条を首相から下ろす動きが強まっていた。昭和19年7月、抵抗する東条に引導を渡したのは、あの岸信介だった。赤城宗徳議員の証言より―「戦前はネ、誰か閣僚のうち一人が反対すれば総辞職になった。毎日僕らは岸さんの所に行って岸さんを煽った。岸さんもその積りで「このままじゃ負けちゃうから東条さんのいう事は聞いちゃおれん」と。結局内閣不統一という事で(東条が)辞める事になった。

昭和19年7月、東条英機首相退任。東条は志なかばにして首相の座を降りた。日本の敗戦は決定的にみえた。

昭和19年7月22日、第37代首相に小磯邦昭が就任。後継首相となる陸軍首脳が見あたらず，小磯におはちが回ってくる形での就任。宰相として政府のかじ取りをまかされた。異様ともいえる精神論に固執していた

小磯は、宇垣一成の穏健派に連なる陸軍大将として、東條英機内閣の後継首相に担がれていたが、軍人としても政治家としても特筆すべき業績は無かった。敗戦必至の状況で、戦争の幕引き役の重責を担い発足した小磯内閣であったが、出身母体である陸軍との妥協に固執して、ズルズルと被害を拡大させた。小磯首相は「アメリカ軍に一撃を加えた上で有利に対米講和を進める」という都合の良いプランを夢見たが、本土爆撃が本格化するなか、日本軍に余力が無いのは明らかであり、陸軍の協力さえ得られないまま、徒に時間だけが経過した。レイテ沖海戦敗北・東京大空襲・硫黄島陥落・沖縄侵攻・日ソ中立条約廃棄通告と、無能な小磯内閣のもと日本はあっという間に、最悪の局面まで追込まれた。個人の力量も、支持基盤も弱い小磯國昭に難局打開を期待する方が悪いとはいえ、不作為による大損害の責は免れまい。長いあいだ閑職にあって戦局，国内情勢にも暗く，ただ「一億総武装，本土決戦」を叫ぶばかり。「戦争責任」はともかく、国民に対する責任は重い。

昭和２０年４月７日，沖縄戦のさなかに小磯内閣は総辞職。戦後，極東国際軍事裁判で、陸軍一夕会・統制派にも属さず、順送り人事で突然首相に担がれた小磯國昭に対する東京裁判の終身刑判決は、不公平にもみえるがＡ級戦犯として終身刑の判決をうけ所謂「巣鴨プリズム」で服役中食道ガンで死去７０才。

昭和20年4月7日第38代首相に鈴木貫太郎が就任。戦争終結の任を担うことにー。（本人は、不本意ながら天皇の願いで苦渋の受諾 。１８８５年12月22日に、伊藤博文が大日本帝国の初代内閣総理大臣に就任して以来、現在にいたるまで、天皇陛下から「どうか頼む」と言われて就任した首相は鈴木貫太郎の他にはいないでしょう。そして天皇が鈴木に望んだことはただ一つ「大日本帝国陸海軍や帝国臣民の混乱を、最低限に抑える形で戦争を終らせたい」この一点だけでした。「枢密院」とは、戦前の日本にあった天皇陛下の諮問機関（意見を求める有識者会議）です。この会議において、若槻、近衛、岡田、平沼の４人は後継総理に枢密院議長であり元侍従長だった鈴木貫太郎を首相候補に挙げました。しかし元海軍大将である鈴木貫太郎は元々「軍人が政治にかかわるべきではない」という考えを持っており「とんでもない話だ！断固としてお断りだ！」と烈火の如く怒ってこれを否定しました。ですが「重臣会議」は建前上、内大臣が招集した形になっていますが、実際はその前にすでに根回しが出来

上がっているのが常であり、この時も、既にそうなっていたのです。つまり先の4名だけでなく、内大臣の木戸も鈴木支持に回っていたことになります。しかしながら、この流れに東條だけは反対を示しました。

東條は今の戦局は、小磯内閣の指導に陸海軍が従わなかったことが原因と見ていました。小磯は確かに陸軍大将でしたが、組閣時は退役していて身分は予備役であり、陸軍大臣を兼ねていなかったため、軍は小磯の言うことを聞いていませんでした。東條はこの事実から、海軍出身である鈴木が総理になれば、陸軍が従わない可能性があると考えたのです。

しかし、岡田が「畏れ多くも天皇陛下の大命にしたがって組閣をする総理に対し、そっぽをむくとは何事か！。陸軍がそんなことだから、戦いがうまくいくはずがないのだ！」と怒鳴りつけた。此の為、東條は黙り込んでしまい、重臣会議は全員一致で鈴木を首相とすることに決定しました。呆れたのは当の鈴木自身です。本人の知らぬところで、あれよあれよと決まってしまったものですから、大変です。内大臣の木戸が、天皇陛下に重臣会議の結果を奏上すると、陛下は鈴木を呼び出し、鈴木に対して「組閣の大命」を下しました。しかし、鈴木は「誠に畏れ多いことでございます。私は海軍の出身であります。軍人が国政を預かることは決して宜しからずと存じます。何卒ご容赦くださいませ。何卒、何卒・・・」と、繰り返し繰り返し固辞します。しかし昭和天皇陛下は、「鈴木よ」とお声をかけられ、「おまえの言いたい事も、お前の気持ちもよくわかる。だが、戦争の激化しているこの重大な局面においては、もうほかに人はいないのだ」と、鈴木をさとすように、

「だから鈴木よ、どうか頼むから組閣の大命を引き受けてくれ」と言葉を続けられました。これにくわえ

昭和天皇の母である貞明皇太后（大正天皇の皇后）からもお願いされ、鈴木は、自らの主義と、わがままを通すことができなくなり、遂に組閣の大命を拝受することになります。昭和20年6月26日、沖縄が多くの犠牲者を出し陥落。昭和20年8月6日、広島の原爆投下。3日後、長崎にも投下される。その夜、日本政府は御前会議を開き、鈴木「天皇の名の下に始まった戦争を誰しもが納得する形に終わらせるには、天皇の御聖断しかありえない」という考えに行き着きます。日が変わり8月10日午前2時頃、鈴木は会議の席上で起立し「議論は出尽くし、意見は別れ、もはや収拾の余地がありません。誠に以って畏多い極みでありま

すが、これより天皇陛下の聖慮を以って本会議の決定と致したいと存じます」と申し上げて天皇の御前に向かうと、

昭和天皇陛下は

「朕は、先程からの外務大臣（東郷）の案に同意である。陸軍大臣ならびに軍令部長の弁を聞くに、現状として陸海軍の本土決戦準備が全くできていない。この状態でこのまま戦いを続ければ、さらなる犠牲は勿論、最終的に日本という国がなくなってしまう可能性すらある。それだけは避けなくてはならない」と仰せられて、ご聖断により「ポツダム宣言受諾」・無条件降伏が決まりました。

敗戦色濃厚な戦時下において、政治的にも混乱していた日本政府をまとめ上げ、難物だった陸相、海相を制御し、天皇陛下の意に沿った終戦工作を実施して、ポツダム宣言受諾、玉音放送による国民への周知までを成し得たのは鈴木貫太郎の尽力が大きいと思います。

時の陸軍大臣阿南大将は、戦争末期に降伏への賛否を巡り混乱する政府で、本土決戦への戦争継続を主張したが、昭和天皇の聖断によるポツダム宣言受諾が決定され、同年８月１５日に割腹自決。日本の内閣制度発足後、現職閣僚が自殺したのは、これが初めてであった。

昭和20年８月15日終戦の玉音放送が全国に流れ、日本人だけで死者３００万人以上、アジアでは１千万人以上もの命が失はれた戦争が茲に終ったのです。

追記１

喜劇王チャップリン。大の親日派で、生涯４回来日している。日本橋で夫人と好物の天ぷらに舌鼓を打つのがお楽しみ！！。その内の２度、チャップリンは、日本の歴史を動かす大事件に遭遇している。昭和７年５月14日、ハリウッドの大スターの訪日に日本中が沸いた。熱狂の渦巻の中を、もみくちゃになってチャップリンはホテルに入った。翌日には時の総理大臣犬養毅（第29代首相との会談が首相官邸で予定されていた。だが会談当日の５月15日、海軍の青年将校達が首相官邸を襲撃。五・一五事件である。犬養は殺害された。チャップリンは急きょ予定を変更していて、危ふく、難をのがれた。２日後、首相官邸を訪れたチャップリン。旅行記の中でこう綴っている。『首相は家族と一

緒だったため自分が殺される場面は見せたくないという思いから，凶漢たちを別室に通したそうだ。実に立派な態度である』と。その4年後の昭和11年2月、二度目の来日の際には、東京には戒厳令が布かれていた。二・二六事件である。陸軍の青年将校達が、武装蜂起。首相官邸は、再び血に染まった。チャップリンが2度にわたり目撃したのは、首相の命までも奪いながら戦争へと突き進む日本の姿だった。

追記2

『あの者を呼び返せ話せばわかる！』

１９３２(昭和７)年５月１５日の五・一五事件。首相官邸で犬養首相は海軍青年将校らの拳銃で暗殺されるという悲劇が起こります。丁度この日、官邸に犬養の家政婦(宮城県出身)・今木あさ子さんがいて事件に遭いました。故あさ子さんが生前に語った肉声のテープ(１９９３年犬養の祈念館・木堂館にて、岡崎健作さん収録)がホーページでわかり、事件当日の凄惨な様子を、つぶさに知ることが出来ました。「悪党だ々々だ、早く犬養を隠せってね、というような意味の分からない声がしたかと思うと、数人の軍人が軍靴のまま玄関を蹴破って入って来たんです―総理は何処だ―と言いながらね。私の胸に拳銃を突きつけるんです。まさか、軍人が殺しにくるなんて夢にも思いませんでした。そこへ総理が『何じゃ何じゃ』と出てきました。そしてすぐ『応接室へ行こう』と言ったの。落ちついてネ。私もその後を２，３歩ついて行ったら『さーお茶を持ってきなさい』といわれ、茶の間に戻りお茶を２杯ぐらい注いでいると、ーダンダンダンーと拳銃の音がして、ビックリして飛んでゆくと、一番さいごの一人が逃げる姿が見えました。私はーだんなさま、だんなさまーって呼び起こしたの。頭部を撃たれても意識はありました。やっと息を吹き返し息の音も聞こえないなかで『今来た若いもんたちをもう一度呼んで来い、話せばわかる、話せばわかる』と、２度言いました。それが最後の言葉でした。そして数時間後にお亡くなりになりまったのです」と語っている。テープを再生しながら岡崎さんが言うには、状況から判断して「血まみれになった犬養さんを抱き起こした今木さんは入口を睨むばかり。『話せばわかる』は将校たちには届かず、首相の悲痛な絶句になった。

尚、犬養の孫である道子氏の随筆によるとーー。１９３２(昭和７年) ５月15日は晴れた日曜日だった。犬養は総理公邸で寛いでいた。この日、夫人は外

出していた。17時頃、護衛の巡査が走り込んできて暴漢侵入を告げ、逃げるよう促した。犬養が「逃げない、会おう」と応じたところに、海軍少尉服2人、陸軍士官候補生姿の3人からなる一団が乱入してきた。襲撃犯の一人は犬養を発見すると即座にピストルの引き金を引いた。しかし不発に終わり、その様子を見た犬養は「撃つのはいつでも撃てる。あっちへ行って話を聞こう」と言い一団を日本間に案内した。日本間に着くと、彼らに煙草を勧めてから、「靴でも脱げや、話を聞こう」と促した。そこへ後続の4名が日本間に乱入、「問答無用、撃て」の叫びとともに全員が発砲した。女中らが駆けつけると、犬養は顔面に被弾して鼻から血を流しながらも意識ははっきりしており、縋りつく女中に「呼んで来い、いまの若いモン、話して聞かせることがある」と命じた。犬養家はこの言葉を後に残したかったのでしょう。

18時40分、医師団は「体に入った弾丸は3発、背中に4発目がこすれてできた傷がある」と発表した。見舞いに来た家人に犬養は「九つのうち三つしか当らんようじゃ兵隊の訓練はダメだ」と嘆いたという。しかしその後は次第に衰弱し、23時26分に絶命した。享年78才。―大阪新聞―

5月19日、犬養の葬儀が総理大臣官邸の大ホールでしめやかにとり行われた。たまたま、喜劇王チャーリー・チャップリンが来日中で、官邸からほど近い帝国ホテルに滞在していた。弔電が寄せられ「憂国の大宰相・犬養毅閣下の永眠を謹んで哀悼す」との弔意に、驚く参列者も多かったという。

青年将校たちに向かって、話せばわかると言ったとは、根も葉もないことなのに、定説になっています。その時代には説得力が強いから一人歩きしてしまったのでしょう。倉敷芸述科大学教授で、犬養毅の研究家・時任英人さんは語っている。―

事件当時の世相とテロにふれてみます。――ホームページより――

９０年前のこと、昭和４年のニューヨーク株式大暴落の余波を受けて、翌５年日本も大恐慌に陥ります。政府は大企業、財閥の救済政策が多く困窮に苦しむ一般民衆は、政府に不満を抱くようになります。同じ４年のロンドン海軍軍縮条約は日・米・英・仏・伊の５ヵ国が参加したが、仏・伊は途中で脱退。主力艦数を英・米各15隻・日本９隻と限定し、補助艦艇の総トン数比を米英各10に対し日本７とする内容で締結されます。日本にとって屈辱的な内容に「この条約締結は統帥権の奸犯」として海軍は厳しい不満を抱きます。締結時の外相若槻礼次郎張本人に向けるべき過激派の矛先が、政府に向かう事件に発展します。条約締結当時、立憲民政党総裁の犬養は、選挙に大敗したばかりのときで、当時は海軍の主張を推す姿勢であった。昭和６年犬養が総理大臣に就任してまだ半年たらずで、テロの狙うところとなり、海軍青年将校の手で暗殺されるとは、皮肉な事件であります。

このテロ事件は、大掛かりなものでした。五・一五事件で殺されたのは犬養毅首相だけですが、元老西園寺公望、内大臣牧野伸顕、侍従長鈴木貫太郎らも同様に狙われました。国を変えようと意気込んだ青年将校たちは、幾つかの組に分かれて、一斉にテロを起こします。

当日の各班の行動

第一班：首相官邸及び日本銀行の襲撃

一つ目の組は、海軍士官の三上卓らが中心となる９人で、午後５時半ごろ首相官邸に乗り込み、官邸にいた巡査を銃撃し、食堂にいた犬養首相のもとに殺到します。

三上は犬養を見つけると、興奮のあまり装填し忘れていることにも気づかず、銃の引き金を引きました。慌てて胸ポケットからバラ弾を取り出す三上に向かって、犬養は落ち着いた様子でした。

犬養は「君らはなぜこのようなことをする。まず理由を聞いたうえで、撃たなくてはならない事があるならば、その時に撃たれようじゃないか」と言い、一同を応接室に案内します。

犬養は自分の考えや、日本が置かれている状況を若い軍人たちに説き聞かせようと考えていたようです。

しかし、別の将校が「撃て！撃て！問答は要らん！」と叫び犬養の腹部めがけて発砲。三上も慌てて頭部を撃ち抜き、将校たちは逃走しました。

応接間に駆け付けた女中に向かって犬養は「今の若いもんをもう一度、呼んでこい。よく話して事情を聞かせる」と最後まで言論で説得しようとします。

然し犬養の容体は悪くその日の深夜絶命しました。

第二班：牧野伸顕内大臣邸の襲撃

二つ目の組は、牧野伸顕内大臣邸を襲い、手榴弾を投げ込みましたが、牧野伸顕はいなくて無事でした。

第三班とその他の班：立憲政友会本部の襲撃

三つ目の組は、立憲政友会本部に手榴弾を投げたのですが、不発。

他に、この決起部隊に呼応して、橘孝三郎という人を中心とする愛郷塾のメンバーたちが東京の発電所を襲いました。

東京を暗黒にして何かをやろうとして、行ってみたはもののどうすればいいか分からず、結局失敗します。

これ以降、政党政治が終わりを告げ、軍部の発言力が増してゆく時代が到来。その後の政治に大きな影響を与えるのです。

続く

２０２１(令和３)年６月回想記・９６才